基礎経済科学研究所 自由大学院
大阪第三学科(金融流通協同組合論ゼミ)からのたより

［第８０５回ゼミ報告］ ２０２０年２月２１日号

”Diamond Princess”が”Wuhan”状態になっていたと、海外メディアから批判。対する我が国政府の Coronavirus 対策会議、桜疑惑の首相は８分間、諸大臣は欠席…

２月１２日のゼミは萩原伸次郎『世界経済危機と資本論』第４章「新自由主義的システムの形成と経済危機」の「３金融引き締め政策とレーガン恐慌」「４金融自由化と金融危機」を松村さんの報告で行いました。通貨学派的考え方でハイパワード・マネーをコントロールすれば物価をコントロールできるのではなく、マネー・サプライは商品市場での需給において決定される。実体経済の拡張による信用需要の増加がマネー・サプライの増加につながる。レーガンは伝統的マネタリズムでインフレ退治を行った。彼の金融引締め政策と高金利からアメリカの経済恐慌が対外債務累積国に膨大な負担をもたらし国際金融恐慌を発生させた。そこで金融緩和策へと乗り移り、ハイパワード・マネーが大幅に増加した。この急速な景気回復は実質賃金の下落と経済の金融化であり、レーガンのインフレ退治はニクソン以降の新自由主義的経済政策の一環である。産業構成において金融化が決定的となった。戦後のニューディール体制が完全に破壊されたのである。商業銀行は苦境から抜け出し、消費者信用と不動産担保貸付が二大貸付分野になり、それは小売・卸売・サービス産業の展開で消費者信用が活発になったことによる。また産業企業は設備投資ではなく、借入金に依存する投機的企業買収による収益の道を選んだ。討論では、米国は大規模な投資銀行と違い、商業銀行は州単位で小さいから倒産も多い。流動比率は今使える資金で短期貸付金の依存度とは違うのでは。産業部門間の生産構造の内容を書いていない。政策が変わる理由が詳しく書いていない。レーガンの経済政策がアメリカ経済の基本的傾向と言い切るのはどうか。レーガンとトランプは似ている、労働者の味方のふりをして、貿易では中国を敵に回し、実はウォール街向けの金融政策を行う、日本では竹中平蔵。かつてスウィージーが独占資本を内部資金として説明したが、現代の米国は非金融業が下で、金融業が上となった。それはモノづくり軽視という７０年代から８０年代の転換期による。出席は、小野さん、高島さん、川口さん、松村さん、竹内さんと高田の６名でした。

＊５月１３日ゼミは、MMT 理論の提唱者の一人である L・ランダル・レイについて、竹内さんの報告を予定しています。
＊次回の会場は、いつもの淀屋橋道修町・アイクルの部屋です。

＊＊＊＊＊＊　ゼミ日程　＊＊＊＊＊＊＊

２月２６日(水)午後６時半～９時　　淀屋橋道修町・アイクルの部屋
マルクス『資本論』第３巻３２章 貨幣資本と現実資本Ⅲ 報告・高田
３月１１日(水)午後６時半～９時　　淀屋橋道修町・アイクルの部屋
萩原伸次郎『世界経済危機と資本論』第５章 新自由主義論理 報告小野さん
３月２５日(水)午後６時半～９時　　淀屋橋道修町・アイクルの部屋
マルクス『資本論』第３巻３３章 信用制度下の通流手段 報告者未定
４月８日(水)午後６時半～９時　　淀屋橋道修町・アイクルの部屋
萩原伸次郎『世界経済危機と資本論』第６章・第７章　報告：竹内さん
その後　4/22, 5/13, 6/10, 6/24（アイクルの部屋）